

## ●報道特集『アキノ白昼の暗殺』

特ダネは一日にして成らず

三好 和昭(TBS)



1983年8月21日マニラ国際空港で暗殺されたベニグノ・アキノ氏(享年51歳)前夜、台北で“大変な危険がある”とインタビューに答える。

みんなの民放史  
題字 中川 順

最近、フィリピンのニュースは日本のメディアにあまり登場しないが、かつて世界の耳目を集めた大事件があった。

1983年8月のアキノ氏暗殺事件。あれから30年近い歳月が流れた。アキノ氏とは、当時のマルコス独裁体制を脅かす野党のリーダーであったが、故国を追われアメリカに亡命していた。氏が帰国を決意し、マニラ空港に着いた途端、暗殺事件が勃発する。去年当選したアキノ現大統領の父親である。

TBSの報道番組『報道特集』は事件の1週間後、83年8月28日に『アキノ白昼の暗殺』と題する1時間ものを放送した。誰が考えても「体制側の犯罪」なのだが証拠がない。そこで政府発表の矛盾点を丹念にあぶりだすことで真相に迫ろうとした。

反響は大きく、特に現地フィリピンにはすさまじいインパクトを与えた。のちのマルコス失脚、コラソン・アキノ(アキノ氏の妻)大統領に至る民衆革命の最初にうねりの一端を担ったといえようか。番組は翌84年、新聞協会賞を受賞。

『民放史』への出稿を求められたが、筆者(当時の番組プロデューサー三好)の記憶も曖昧なので、新聞協会発行の『新聞研究』(84年10月号)に掲載した小文を転載することでお許しをいただきたい。

「あすは殺されるかもしれない」



機内で記者会見するアキノ元上院議員

「撃たれたアキノ氏の死亡確認」のニュースが入ったのは、私が担当している番組『報道特集』の放送中であった。外信部からスタジオへ第一報が届いた時、数か月前のある決断が深い感懷を伴って頭をよぎったが、ともかくオンエア真最中のことだ。急いで原稿をキャスターに渡し、企画モノが終

わったところで速報を突っ込んだ。昭和58年8月21日のことである。

このたびの新聞協会賞受賞は、テレビ局という外部からは一見華麗にして浅薄なイメージの企業の中にあって、普段は地道な取材活動を続け、あまり報われることのない民放報道セクションへの身に余る評価として感激にたえない。これを機会に『アキノ白昼の暗殺』が放送されるまでの内幕をあえてさらすのも、今後のテレビ報道に何らかの意味があるかと思うからだ。

テレビをご覧にならなかった方のために中身をあらまし紹介しよう。番組は三つのパートに分けた。

第一部は暗殺直後の極度に混乱するフイリピン情勢の記者レポート。第二部は「だれが犯人なのか」を推理する番組のハイライト部分。第三部は「なぜアキノ氏は帰国を急いだのか」というマルコス体制下の問題分析である。

番組で光彩を放ったのは、いうまでもなくTBSのスクープとなったアキノ氏の「あすは殺されるかも知れない。事件は空港で一瞬のうちに終わる」という運命的な

台北でのインタビューと、マニラ空港での事件現場のVTRである(事件現場のVTRは米ABCも同行取材しており、2つのVTRがその後の事件究明への最大の手がかりとなっている。写真はTBSのVTRから)。

番組はナゾだらけの事件の解明に向かう。

アキノ機に同乗していたジャーナリスト—TBSの田近記者、横井カメラマン、磯野カメラ助手、共同通信の上田記者らの証言が続く。1年たった今も真犯人が特定できないのは同行ジャーナリストが全員だれも「射殺の瞬間を見ることができなかった」からだ。



連行のため機内に乗り込んだ兵士と握手するアキノ氏

見ることは物理的にできない。従ってVTRも人垣の頭越しに空を映しているだけで、それから8・5秒後に第一発の銃声を記録している。これが運命の凶弾となる。『報道特集』のスタッフの一員である山本清貴記者はVTRを何十回となく見るうちに奇妙な事実を発見した。「連行兵士は3人」とフイリピン政府は発表したのにボーディングブリッジの中で途中からもう一人の兵士が加わっている。



アキノ氏の遺体(右の白い服)が横たわる

ボーディングブリッジの最初の出口から連れ出されたアキノ氏は、上部の踊り場を直角に右折してタラップを降りて行った。機内から追っかけてきたジャーナリストたちは出口前で何人かの男の人垣にさえぎられて、降りるアキノ氏を



タラップの下に倒れていたアキノ上院議員

しかも肩からはピストルをつるすホルスターまでぶらさげているではないか。

また「犯人はタラップ下にいた青シャツの民間人ガルマン」と発表されたが、遺体の銃痕は、後頭部から上あごに斜めに抜けている。それでは踊り場から4人の兵士に囲まれたアキノ氏は8・5秒でガルマンの待ち受ける地面に降り立てるのか。実験を繰り返すと不可能ではないが、かなりの無理がある。その上、ガルマンの凶器「S&W 357 マグナム」を至近距離から発射した場合、頭部はメチャメチャに破碎され、遺体にあるようなきれいな銃痕は残らないとする銃器専門家の証言も得られた。

こうして事件はおぼろげながら輪郭をみせてきた。

そこでわれわれは、①連行兵士は3人でなく4人、②ガルマン犯行説は合理性に欠けると、いずれもフィリップ側発表に疑問を呈し、「アキノ氏はタラップを降りる途中で連行兵士に撃たれた可能性が大きい」と結論づけたのである。

### VTR海賊版が出る

事件から1週間、ミステリアスなナゾ解きの関心もあつてか放送後は視聴者から電話が相次いだ。「まるで推理小説」「フィリップって何と恐ろしい国なんでしょう」……。

同業他社からはおほめの言葉も多く、問い合わせやら取材の申し込みが内外の報道機関から数多く寄せられた。AP通信、ロイター通信、ニューズウィーク、西ドイツ放送などが「東京発」で「兵士四人説」を流し始めた。以後、フィリップン政府は前言をひるがえし「連行兵士は実行部隊の四人に加え指揮官一人の合計五人」と訂正発表を行うにいたる。

事件直後マニラ市内は「ニノイ・アキノ氏の愛称」を返せ」の大

デモに揺れた。

マルコス長期政権の弾圧政治と進まぬ経済発展は、アキノ暗殺をきっかけに民衆を急速に反政府運動へと走らせた。そしてわれわれを驚かせたのは『報道特集』のコービーのビデオテープ、つまり海賊版がひそかにフィリップンに持ち込まれ、出回り始めたことだ。ついには千ペソ(約二万円)のプレミアムがついたり、英語による吹き替え版が登場、秘密上映会が開かれる始末で、その上映会自体がニュースになったりした。そして数十枚の写真をのせた番組の全訳本まで現れた。

真相究明を求める声はその後もやまず、フィリップン政府は、紆余曲折を経て現在のアグラバ女史を委員長とする「真相究明委」をスタートさせたのだが、この番組の指摘が委員会に与えた影響は大きい。

VTRは動かぬ証拠である。同委は番組の海賊版を証拠採用し、そのテープをアメリカのFBIなどに送り、声紋鑑定などもしているという。またTBSの同行記者やカメラマン、番組のスタッフまで証人換問しようとしたが、捜査

上の協力はできないとするTBSの原則から、われわれはこれを拒否したことを付記しておく。



機中に入って来た連行兵士

さて、このような独走体制はいかにして生まれたのか。もちろんラッキーな面もあるが決して平坦な道ではなかった。

事件の起きる数か月も前のことになるが、『報道特集』の初代アンカーマンで現国際部長の北代淳二氏が極秘情報を伝えてくれた。「アキノ氏が近く帰国する。TBSで同行取材するなら先方はOKする」というもの。

アキノ氏と金大中氏—ともに故国を追われアメリカで事実上の亡命生活を強いられた野党の指導者。北代氏は両氏との接触が長く、去年正月にはニューヨークで金大中

に独占インタビュー「拉致・殺害命令は朴大統領が直接下した」との証言を得た記者である。北代氏は『報道特集』在籍当時、アキノ氏追放中のドキュメンタリーを企画し、前記山本記者とともに東京のホテルでインタビューを収録したのが56年のこと(これは結局オクラになつてしまったが)。以後、東京とボストンで会合は続けられ、お互いの信頼関係は強くなつていった。

マスコミの同行取材は身の安全に有利—というアキノ氏側の計算もあつたと思われるが、番組制作者としての私は、生来の貧乏症から番組の「成算」を考えるクセがついている。金大中氏ならともかく、当時日本では無名のアキノ氏である。はたして番組にできるだろうか。その上いくら政情不安のフィリップンでも野党有力指導者の身の上に「異変」が起きると思えないではないか。

迷った揚げ句、北代氏には「ノー」の返答をしてしまった。このドジな決断のまま終わっていただスクープは、遠く彼方に去つていたのであるが、ここで外信部から「救いの神」が現れる。亡命政



治家の帰国、しかもアキノ氏のよ  
うな現政権を脅かす存在の「無事  
帰国」は、それだけでニュースで  
はないか、と。この「再決断」こ  
そが、あの決定的映像に結実、新  
聞協会賞受賞につながるカギとな  
ったのだ。

こうして同行話にのった外信部  
は、田近記者、横井カメラマンを  
台北に派遣。取材クルーは帰国途  
上のアキノ氏と落ち合った上、マ  
ニラ空港に向かう。機上で快活に  
しゃべるアキノ氏、そして到着、  
連行兵士の出現から百十五秒後に  
運命は暗転する。

VTRは「白昼夢」を余す所な  
くとらえていた。

### ダメモトの所産

話は戻るが「同行取材は外信部」  
と決まってから数か月、その間、  
毎週毎週の『報道特集』の制作に  
忙殺され、アキノ氏の件は私の念  
頭からすっかり消えていた。そこ  
に悲報。帰宅してみた11時の『ニ  
ュースデスク』はいまだに忘れら  
れない衝撃を与えた。

田近記者らの大スクープ、激し  
く胸が高鳴るのを抑えかねた一瞬

であった。来週はこのネタで行こ  
う！



スタジオで銃の発射角を説明する料治キャスター

2日後の定例の企画会議。普段  
は2時間で終わるのにこの日は4  
時間も議論を重ねた。事件はナゾ  
だらけである。確かにスリリング  
で話題性に富んでいる。その上、  
特ダネにも恵まれた。しかし取材  
時間はわずかに三、四日しか残さ  
れていない。どこから攻めていけ  
ば一時間の番組ができるのか。甲  
論乙駁、議論は百出したがとにか  
く突っ込んでみよう。会議の終わ  
るころ、おおまかな構成案が形に  
なり始めた。各記者の担当を決め  
る。マニラ取材班はあわただしく  
出発、国内班は銃器専門家にあた

る者、スタジオセットの打ち合わ  
せに走る者、VTRの徹底分析に  
かかる者、全員フル活動に入った。  
それからというものは夜を日に継  
いでの激戦だった。そして放送は、  
オンエア数分前になってやっと全  
部の素材の編集が終わる。

この事件は多くの報道陣に囲ま  
れた中での凶行、しかしだれが撃  
ったのか、その瞬間の記録はどこ  
にもないという難問である。各種  
のデマ情報、混乱する証言がとび  
かい、事件の歴史的位置づけもゆ  
がめられる可能性があった。そこ  
で唯一の物証であるVTRを入念  
に検討し、そこから「真実」を発  
見しようとしたわれわれの狙いは、  
取材時間の制約から粗雑の感はい  
ぬがれないが、ほぼ満足できるも  
のとなった。

「ダメモト」という言葉がある。  
テレビ界の一種の業界用語で、ど  
のへんまで「普及」しているか不  
明だが「ダメでモトモト」の略だ。  
見通しがたたないからやめるので  
はなく、何事も冒険精神でチャレ  
ンジしてみよう、失敗してもいい  
ではないか、という意味である。  
「アキノ白昼の暗殺」は「ダメモ



群衆に送られる棺の車

ト」の所産でもある。またニュー  
スソースとの深い接触のたまもの  
でもある。陳腐なことながら「特  
ダネは一日にして成らず」の感を  
禁じ得ない。

資料 TBS

### 事務局からのお知らせ

☆ 北陸民放クラブ・富山事務局

〒930-8585

富山市牛島町10-18

北日本放送(株)総務人事部内

TEL 076-432-5555

☆ 九州民放クラブ・大分事務局

〒870-0938

大分市今津留3-1-1

㈱大分放送総務部気付

TEL 0975-58-1111

FAX 0975-35-8518